なかなか遺産緊急シンポジウム　どうする旭館？









これまでの100年を、これからの100年につなぐために

森文醸造㈱　代表　森　秀夫（ひでお）さん

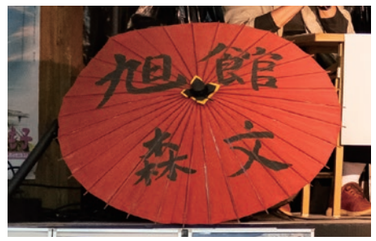


今回のシンポジウムで皆さんの話を聞き、意見を交わす中で、建物の歴史的価値と「残すべき」という意識を皆さんと再確認できました。一方、実現には資金面などで厳しい現実があります。本気で残していくために何をするべきか、100年目にして改めてスタートラインに立った気持ちです。

老朽化が進む建物はこれまで何とかしのいできましたが、状態を専門家に見てもらったことで、直さなければいけない部分がはっきりしました。内子座もそうですが、保存修理をするにしても長い時間がかかるはずです。現在、クラウドファンディングを実施しています。「森文旭館」を皆さんにもっと知ってもらい、広げていく時間にできればと思っています。









継承したい「なかなか遺産」

旭館は町の有志12人が発起人となり、大正15年10月に開館した活動写真館（映画館）です。長らく町民の娯楽の場として親しまれ、昭和43年に閉館して以降は家具の展示場や倉庫として使われてきましたが、木造の建物は老朽化が進行。雨漏りをきっかけに平成24年、現在の所有者である森文醸造㈱が再整備し、再び映画放映イベントなども開かれるようになりました。翌年には国の登録有形文化財に登録。独特の意匠などから、特異性があり次世代に継承したいと思わせる建物として「なかなか遺産」にも認定されています。

今回は開館100周年を記念して、建物の保存・活用について考える「なかなか遺産緊急シンポジウム　どうする旭館？」が10月12日に開かれました。講演では東京大学名誉教授の村松伸（しん）さんが登壇。旭館が「なかなか」と言われる理由や、内子座とともに存在することの文化的価値などを伝えました。続いて、東京大学生産技術研究所教授の腰原幹雄（みきお）さん、旭館縁日などのイベントを企画してきた山内大輔（だいすけ）さんらによるパネルディスカッションを実施。「これから100年」の活用の可能性について、意見を交わしました。